

# 興味目録検査を用いての女子高等学校生徒の 興味の研究\*

棕 野 要  
平 松 芳 樹

## 1. 問 題

K. Evans<sup>(1)</sup> (1965) は、職業と教育の成功に能力が直接関係する。しかし、興味は成功に対する満足に関係する。仕事はきらいでも、余暇に楽しみを得れば仕事に失敗しないですみうる。また、成功には態度が必要で、始め興味がなくとも努力してやっているうちに興味がわいてくることがありうる。興味の効果は、短期間におけるよりも長期にわたる程あらわれるという。さらに、D. Super & J. Crites<sup>(2)</sup> (1962) は高校と大学で SVIB (ストロング職業興味目録検査) を使用することの価値を述べ、能力を基礎に選抜がなされているとき、興味を基礎に選抜すると教育的達成の予測に役立つ。それは同じ能力を持つ中途退学者と比べ、学校修了者は SVIB の得点が高い者が多いからだと述べたが、女子については職業と家庭との問題があって SVIB の教育的価値が半減するという。また、D. Campbell (1971) は、「職業を決めようとしている学生などが、その職業を楽しくやれるか判断するため、数種の職業を試みしてみる余裕があるならこの興味目録検査は不要である。しかし、それができないから、彼の選択(興味)が種々の職業についている人々の選択(興味)と比べてどうであるかを彼が理解するように援助するのである。」<sup>(3)</sup> と述べている。これら3者は、職業指導または進路指導における興味と興味検査の意義を考察したものである。

他方、W. Dipboye & W. Anderson<sup>(4)</sup> (1959) は、9 学年生と12 学年生とに、安定性・特権(高く尊敬される地位)・給料など9つのうち、どれがあなたの職業に一番大切かを尋ねて、職業的価値の順位をつけた。順位の第1は「興味ある仕事」で、第2位は「安定性」であった。また、W. Gribbons & P. Lohnes<sup>(5)</sup> (1965) も同様に、8・10・12 学年の3回、縦断的に調査すると、少女の職業的価値は「満足」と「興味」とが順位第1と第2位を占め、5年間不変であった。

職業と学業の達成には、個人の能力、適性(能力可能性)、興味、態度、性格、環境事情などが関係するわけであるが、職業や進学の見路選択に際して、少女達がかつとも価値ありとする満足と興味の面を、学業成績や知能とともに一層重視する必要があると考えられる。

さて、女子高校生の興味パターンの研究は、すでに古典的になった H. Carter & E. Strong<sup>(6)</sup> (1933) のものがある。最近では、男子高校生の研究としては G. Madaus & R. O'Hara<sup>(7)</sup> (1967) の横断的研究、棕野要と柳井晴夫<sup>(8)</sup> (1977) の縦断的研究などいくつかあるけれど、女子高校生を取扱ったものは極めて少ない。こうした中で、A. Rezler<sup>(9)</sup> (1967) はハイスクールの3、4 学年生 515 名中将来の職業志望で、医学志望者は、数学と理科志望者より科学的と

\*A study of senior high school girls' interest by using an interest inventory test.

社会奉仕的興味点が高く、また、看護婦志望者は、教師志望者より戸外と科学的興味が高く、計算的・文学的と書記的興味が低いなど、集団間の興味パターンの分化が見られることを明らかにした。

日本における女子の進路指導に使える職業的興味の研究は乏しい。本明寛、浅井邦二、織田正美<sup>(10)</sup> (1969) は短大生の進路指導のための調査を10種類の女子職業人と関係づけて、短大生の興味をSVIB方式を参考にして調査したが、職業興味尺度構成までには到っていない。棕野ら<sup>(11)</sup> (1976) は大学進学者中における短大進学者の増加、それに短大のうちで女子の占める学生数の増大から、女子短大生の興味測定尺度を作った。成人の諸職業基準でなく短大の6つの専門学科を基準にし、キャンベルのSVIB方式に基づく6つの興味尺度とした。これは短大生の将来の進路指導のためではなく、女子短大へ進学しようとする女子高校生の進路指導のためである。6つの尺度のうち、食物栄養科と音楽科の尺度とは尺度そのものの欠陥から改訂を必要とする<sup>(12)</sup>のであるが、本研究では未改訂のまま使うことにした。

本研究の目的はこの短大生基準の興味尺度を使って女子高校生の興味パターンの特徴をみようとしますが、次の仮説を立てて検証しようとする。

仮説1、女子高校生の希望進路、希望職業、特技・趣味、好きな学科の4方面のそれぞれにおける下部集団間に興味の差違がみられる。

仮説2、短大生の興味と比較して女子高校生の興味の結晶化の程度は発達の未成熟である。

一般に進路については、諸能力・興味・要求される進路の選択の三者が合致するとき、その個人の最大適応が得られる<sup>(13)</sup>とすれば、知能と学業成績、要求される選択を基礎に指導する傾向になりやすい進路指導に、興味の客観的資料が加えられうるならいっそう効果的となるのではないかと考えられる。

## 2. 方 法

1. 対象：岡山市内のある私立女子高校2学年全員453名（普通科9学級419名、音楽科1学級34名）に実施した。この学校では、学園通信第1号（1976）によるとその年の3月の大学進学は4年制大学に約25%、短大に約50%であった。

2. 検査場所と検査日時：各自の所属の学級10個の教室に別れて実施した。1978年5月28日午後1時半から約1時間。

3. 検査者：著者2名と2学年担任教師12名。

4. 検査道具：棕野要らの作成した興味検査<sup>(14)</sup>担任教師と学校当局者の示唆に従い検査項目のうち34項目は右側に括弧して簡単な注釈語を加え、5項目の漢字に振仮名をつけた。また、教育的配慮から10項目の語句を変更した。たとえば「オートバイ乗り」は「サイクリング」に、「パチンコ」は「トランプ」に変えた。このうち、3項目は興味尺度の種類によっては得点に影響する可能性があった。1項目は4つの尺度に、他の2項目はそれぞれ1つの尺度の得点に関係する以外は一切被検査者の得点に支障とならなかった。

5. 手続

イ. 教示

各学級教室で1名の教師から検査用紙が配布されるのを待って著者の1人が放送室からマイクを通じ必要な教示をいっせいに伝達した。教示では、あまり考えないで第1印象で各項目をチェックすること、400項目のどの項目もチェックもれのないこと、早目に次ぎ次ぎに進むことなどを伝えた。

ロ. 資料の整理

- (i) 採点：前述の短期大学生の6つの専門を基準にした尺度のうち、被服科尺度を使って全員を採点し、検査用紙のフェースシートの、1) 希望進路 2) 希望職業 3) 特技・趣味 4) もっとも好きな学科、の4つの方面のそれぞれにおける下部集団間の興味得点を比較した。
- (ii) 希望進路における大学進学希望の下部集団を、1) 被服科 2) 食物栄養科 3) 幼児教育科 4) 看護科 5) 音楽科 6) 文学科の各志望の6下部集団に分け、それぞれに対し6つの基準尺度得点を算出した。
- (iii) 特技・趣味の各方面においては、短大2年被服専攻生と短大1年の一般集団と比較した。
- (iv) 代表見本の抽出：高校2年全員から無作為に抽出した60名を全体の代表見本とし、その見本に対し次の処理をした。
  - (a) 代表見本を前記短大の6つの興味尺度で次々に測定したのでこの同一見本から6つの測度が得られた。
  - (b) この6つの測定により得られた得点間に相互相関係数を算出した。
- (v) 大学への希望進路別集団と高2の代表見本において、6つの短大専門学科基準尺度で測定し、その得点でプロフィールを描いた。

### 3. 結 果

#### 第1. 下部集団の興味分化

仮説1において短大生基準の興味目録検査を使った場合、諸方面での下部集団間に興味の分化があるということであった。棕野要は男子中・高校生に SVIB 方式で新しく作成した興味目録検査を実施した結果、5方面のそれぞれの下部集団間に興味の差があることを示した。<sup>(45)</sup> また先に述べた A. Rezler の女子高校生の場合、同じパイオニア的職業でも医者志望と理・数学者志望に興味の差違があるという。

本研究においては、短大生基準の6つの尺度のうちの一つである被服科基準尺度を使って4方面のそれぞれの下部集団間の興味の差違を検討した。この場合、興味得点は直接には短大被服科2年の興味にどの位近いかを示すけれど、その事はねらいではなく、下部集団間の違いの程度を検討するための手段として被服科の尺度を借りたのである。

#### (I) 希望進路別集団

表1は「就職・家事など」以外は大学進学希望の下部集団である。被服科尺度で測定したためか、被服科志望が最高55であり、短大被服科2年の平均49.9より高い ( $t=2.814^*$ 、以後\*は  $P<.05$ 、\*\*は  $P<.01$ 、\*\*\*は  $P<.001$ を示す)。表の得点の高い集団は短大被服科2年生の興味に近いことを示し、低い集団はそれに類似しないことを示す。被服科志望は「就職・家事など」との差は有意でない ( $t=1.34^{ns}$ ) が、それ以外の集団との差は有意である。音楽科志望は被服

表1 女子高校2年生の希望進路別集団の興味平均点と標準偏差 (被服科尺度)

希望進路	被服	食物 栄養	幼児 教育	看護	音楽	文学	文科系	理科系	美術 体育等	進学 希望	就職 家事等	無反応	計
人 員	26	27	75	3	40	67	32	14	23	46	53	47	453
平 均	55	45	41	52	30	46	44	44	45	48	51	50	45
標準偏差	8.20	13.75	12.50	1.0	11.43	9.33	10.59	12.19	10.86	10.17	12.32	11.73	12.67

〈注〉 文学は国文・英文など純文学。文科系は4年制大学の純文学以外の文科系志望。理科系は薬学、獣医、数学など。進学希望は学部、学科名のない進学希望。就職・家事等は進学志望以外のもの。

科志望と一番似ないことが分かる。図1は表1を図示し、全体の平均得点を○で示した。

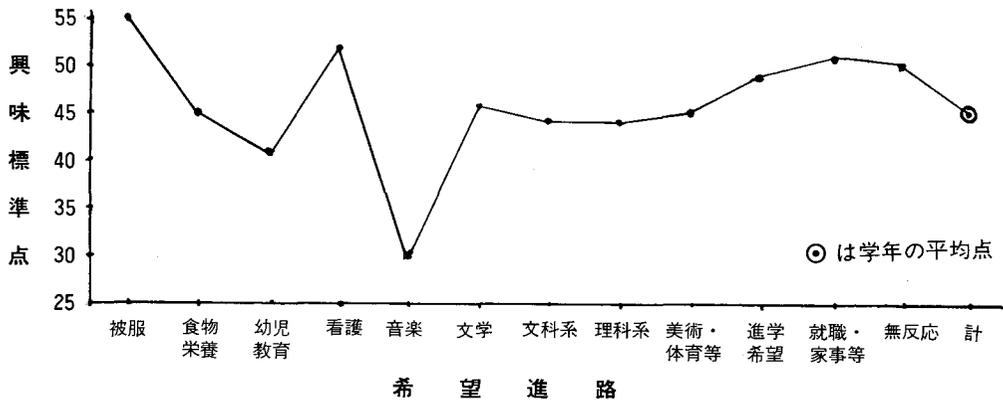


図1 女子高校2年生の希望進路別集団の興味平均点比較 (被服科尺度)

表2 女子高校2年生の希望職業別集団の興味平均点と標準偏差 (被服科尺度)

希望職業	調理方面	美容関係	商業	技能的職業	服・装飾	サービス	保母	美術芸術	音楽教師	音楽関係	教師	公務員・会社・銀行員	放送	家政	その他	無反応	計
人員平均	13	14	27	15	19	19	35	24	26	7	55	23	5	5	26	140	453
標準偏差	48	54	53	47	52	45	44	44	30	34	41	50	39	53	48	46	45.3
	14.99	9.46	9.64	12.63	13.09	9.14	8.99	7.90	11.53	15.51	13.03	11.36	19.34	17.76	10.44	12.14	12.67

〈注〉 調理方面は調理士、栄養士。美容関係は美容師、ファッションモデルなど。服・装飾はデザイナー、インテリアデザイナーなど。サービスはスチュワーデス、看護婦など。技能的職業は歯科衛生士、薬剤師、コンピューター技師、臨床検査技師など。家政は和裁、洋裁。

## (II) 希望職業別集団

前と同様に希望職業を14個の種類に分けると表2になる。短大被服科尺度での興味得点からすれば、美容関係は表の合計欄の全体平均より高く ( $t=2.427^*$ )、商業、家政、服・装飾と差がないが美術・芸術よりは高い ( $t=3.13^{**}$ )。ここでも音楽の方は最低である。希望職業の方面でも明らかに下部集団間に興味の差をみるが、無反応者が140名(全体の約30%)は多い。女子高校2年1学期ではまだ将来の自分の職業が定まりにくいことから来るのであろう。

## (III) 特技・趣味別集団

表4(23ページ)の高校2年の欄に示した特技・趣味の下部集団のうち、手芸は本研究における被服科尺度で測定した場合の他のすべての下部集団の得点より高い。音楽鑑賞は歌・音楽との差は有意でない( $t=1.923^{ns}$ )が、器楽および詩・絵画より高い( $t=7.289^{***}$ ,  $2.647^{**}$ )。同じ音楽の趣味でも音楽鑑賞を趣味とする集団と器楽を趣味とする集団とは興味の質において異なる訳である。

## (IV) もっとも好きな学科別集団

もっとも好きな学科で下部集団に分けたのが表3と図2である。音楽を好む集団が最低で、その次に低い現代国語と有意の差がある ( $t=2.405^*$ )。また、現代国語と美術および体育との差は有意である ( $t=2.17^*$ ,  $2.12^*$ )。

以上4つの方面からそれぞれの方面で下部集団に分け、その間の興味平均点を検討してきたが、いずれも集団間に興味の分化を証明し得るようである。

表3 女子高校2年生のもっとも好きな学科別集団の興味平均点と標準偏差（被服科尺度）

もっとも好きな学科	英語	数学	国語	現代国語	日本史	世界史	歴史・社会	生物・化学	美術	音楽	体育	家庭	無反応	計
人員平均	127	57	24	14	28	28	19	18	26	37	42	9	24	453
標準偏差	45	49	45	41	47	43	45	48	50	31	50	53	49	45
	11.83	11.72	13.26	16.74	12.12	10.89	14.58	9.75	7.83	12.48	8.84	11.14	13.14	12.67

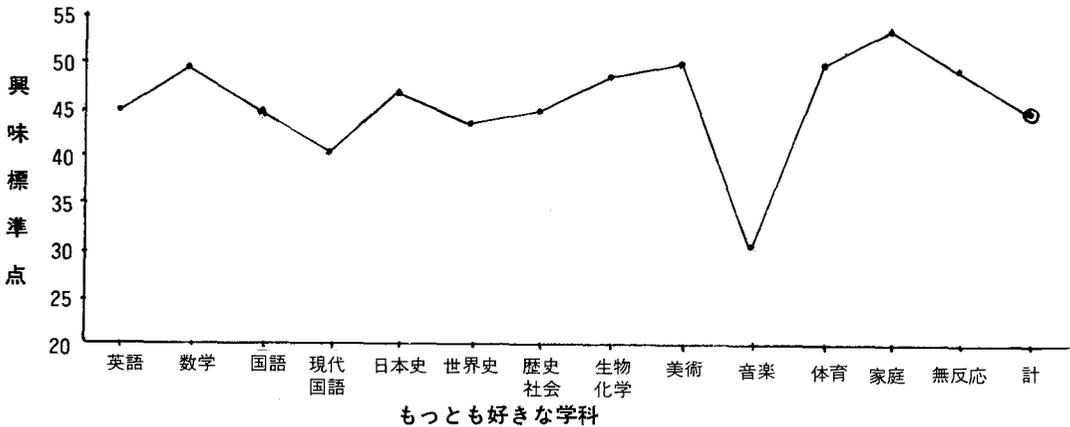


図2 女子高校2年生のもっとも好きな学科別集団の興味平均点比較（被服科尺度）

## 第2 女子高校2年生の興味発達

仮説2は、短大生に比べ女子高校2年生の興味は発達の未熟であるというものであるが、はたしてそうであろうか。

H. Carter & E. Strong の古典的研究結果は12~20歳の女子に年齢的变化をみなかった。また椋野要<sup>(4)</sup>は、男子の場合であるが中学1年から高校3年まで興味平均点に有意の差をみなかった。これらから SVIB 方式の興味目録検査でテストすれば、12, 3歳以後の興味は集団的にかなり安定していると仮定されよう。

### (I) 女子高校2年生と短大生との比較

今までと同様に、短大被服科尺度で測定した興味得点を用いて、特技・趣味の方面において高校2年、短大1年、短大被服科2年を対応させて比較するため表4で示し、図3でグラフに描いた。表の短大1年（一般集団）の資料は1974年に家政（被服と食物栄養）・幼児教育・看護・音楽・文学（国文、英文）の5つの学科に所属する学生それぞれ88~98名ずつ計479名を選び調査したものであり、これを特技・趣味別集団にわけた結果である。短大2年は被服科専攻2年生の場合である（1974年から1976年までに調査）。

器楽から娯楽的趣味まで11個の下部集団を分散分析した。学年間  $F=68.3588^{**}$ 、特技・趣味間  $F=6.7958^{**}$ 、交互作用  $F=1.5107^{ns}$  であるから、学年間も下部集団間も興味平均得点に有意の差を予想する訳である。

図3でもよくわかるように、高2は短大1年（5つの専門のおのおのからはほぼ均等に選ばれた一般集団）よりも11下部集団のすべてにおいて興味得点が高い。しかし、短大被服科専攻2学年生よりは、書道、手芸、スポーツ、その他以外は多くの下部集団で平均点が低い。

この資料から、高校2年生の興味は短大生に比べ未発達かどうか未だ明瞭でない。

表4 高校2年, 短大1年(一般集団), 短大2年(被服科)の特技・趣味別集団(被服科尺度)

特技・趣味	器楽	音楽鑑賞	書道	絵画・詩	手芸	稽古事	技能(物を作るを加える)	読書	スポーツ	歌・音楽	娯楽的趣味	その他	無反応	計	
高校2年	人員 平均 標準偏差	71 34 12.6	93 48 11.5	25 50 10.8	32 42 11.3	14 58 6.7	21 50 10.9	24 44 16.3	35 42 11.7	39 50 10.7	20 43 11.4	15 46 11.7	15 52 8.1	49 48 9.7	453 45 12.7
短大1年(一般集団)	人員 平均 標準偏差	36 28 11.3	47 37 13.0	15 36 14.0	22 37 8.6	47 38 11.2	24 37 12.1	24 39 10.8	65 37 13.1	45 38 10.5	20 26 12.8	22 41 13.2	5 38 11.4	107 37 12.8	479 36 12.45
短大2年(被服科)	人員 平均 標準偏差	13 44 6.1	23 52 8.8	8 46 8.8	12 44 11.0	50 54 10.3	34 50 11.6	18 53 6.9	23 48 7.9	19 46 12.1	2 48 3.5	20 52 9.0	— — —	41 49 9.15	263 49.9 9.86

〈注〉 器楽はピアノ, 電子オルガン, ギターなど。音楽鑑賞はレコード鑑賞, 音楽鑑賞。稽古事は茶・華道, 舞踊。技能は珠算, 硬筆, 写真, 料理, 菓子作りなど。娯楽的趣味は映画鑑賞, 切手集め, 漫画など。その他はショッピング, 文通, 旅行, 動物飼育など。

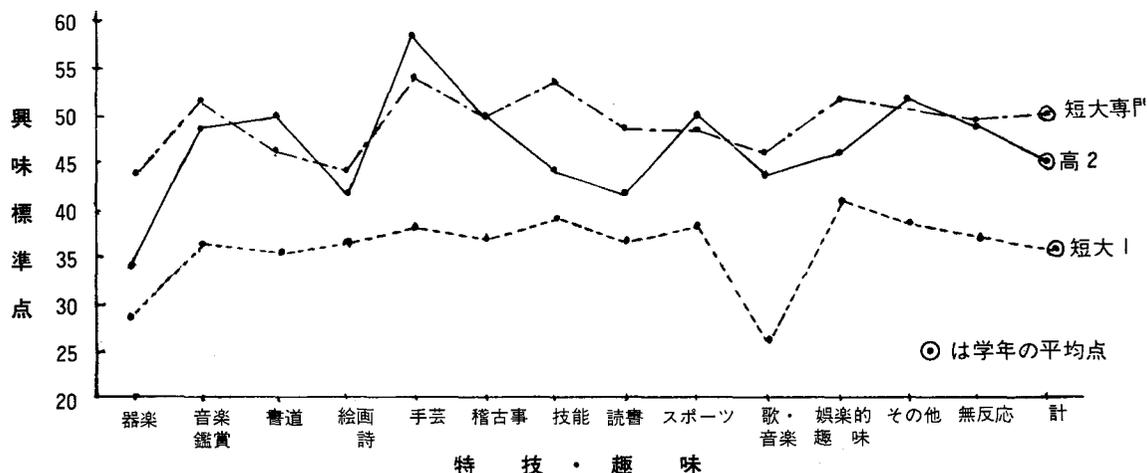


図3 高校2年, 短大1年, 短大専門2年の特技・趣味別集団の興味平均点比較(被服科尺度)

(II) 短大の6つの専門学科学生と高2の6つの大学希望進路別集団の比較

表5は表1の希望進路別集団のうち被服から文学までの6つの大学希望進路別集団を取り出し, 表1が短大被服科尺度1つで測定したのに対しそれぞれの希望進路に対応する6つの短大専門学科尺度で示した興味得点と標準偏差である。すなわち被服科の希望進路の集団は, 短大の被服科基準尺度得点で示し, 食物栄養科の希望進路集団は短大の食物栄養科尺度得点で示すというようにしたのである。短大の専門学科基準尺度の標準点平均は50である筈だから, 高2の興味得点平均が50以上の集団は短大の専門学科尺度での基準学生(専門学科2年生)の平均得点を上まわることを示す。表では被服科希望の平均が55で短大の被服科2年生の興味得点よ

表5 高校2年の6つの大学希望進路別集団を6つの短大専門学科尺度で示した興味得点平均と標準偏差

希望進路	被服	食物栄養	幼児教育	看護	音楽	文学
人員	26	27	75	3	40	67
平均	55	48	42	52	46	43
標準偏差	8.20	9.87	9.56	1.00	11.94	10.34

り高いことになる。看護科希望の3名の集団も平均52だが、少数すぎて果して高2を代表する傾向か疑問であろう。図4は表5を図示したものである。

この前の(I)までと違って、(II)における得点は6つの下部集団のおおのでその希望する進路方向の短大専門学科2学年生の興味にどれ程近いかを示すのである。そこで表5と図4で明らかかなように、高2の被服科希望の下部集団が一番希望する進路方向の短大専門学科学生の興味に近く、幼児教育科希望の下部集団は逆にその希望進路方向の短大専門学科学生の興味に似ていないことを示す。

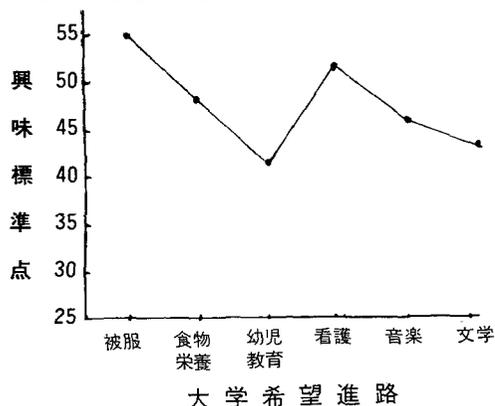


図4 高2の6つの大学希望進路別集団を6つの短大専門学科尺度で示した興味平均点

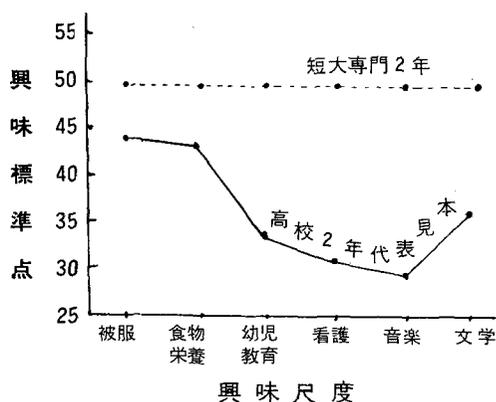


図5 6つの短大専門尺度により測定した6つの短大専門2年と高2の比較

### (III) 6つの興味尺度を用いた高校2年と短大専門学科2年との比較

1976年に女子短大の6つの専門学科基準興味測定尺度を作った時、6つの尺度でそれぞれの専門学科2年の基準集団を測定した結果が表6

表6 6つの短大専門学科尺度で測定した6つの短大専門学科2年生と高校2年生代表見本(60名)の興味得点の比較

興味尺度	被服	食物栄養	幼児教育	看護	音楽	文学
短大専門2年 平均	49.9	50.0	50.0	50.3	49.95	50.0
短大専門2年 標準偏差	9.86	9.98	10.06	10.41	9.97	10.07
高校2年 平均	44.2	42.7	33.4	31.1	28.6	36.3
高校2年 標準偏差	13.42	11.42	11.98	8.57	13.88	10.44

の上半分であり、高2の代表見本(60名)を6つの尺度で反復測定した結果が表6の下半分である。そして両者をグラフに描いたのが図5である。

先に方法の5の口の(ii)で述べた手続によって高2代表見本を選び出したので、この表6の高2が調査された453名全体の特徴を示すとすれば、高2の興味パターンは短大の6つの専門学科2年のどの1つより未熟な興味を示すように思える。この表で短大の専門学科の興味得点にもっとも近い被服科の場合さえ興味の差は有意である ( $t=3.7409^{***}$ )。

### 第3 女子高校2年生の興味の特徴

高2の代表見本を6つの短大専門の尺度得点で示したプロフィールは高2の特徴をはっきり示すが、次に得点間の相関行列表を作ってみる。表7にみるとおり、高2の興味でこれまで著名な特徴を示して来た被服と他の5つの興味得点間の相関係数の差をみると、いずれも差が有意である。

表7の行列表の一番上の欄の被服について、相関係数を大きさの順に並べ、相関係数間の差をみると、次の図6のようになる。

これによると、被服と食物栄養との得点間の関係は正の意味でもっとも高く、被服と音楽の得点間は負の意味で関係が大きい。その他との関係はその中間に有意差を以て並ぶことを知る。他の尺度得点についても同様に尺度関係の密度の差のヒエラルキーを知ることができるであろう。

表7 高2の代表見本を短大専門基準尺度6個で測定した興味得点間の相関行列表

	食物栄養	幼児教育	看護	音楽	文学
1. 被服	.79***	-.36*	.12	-.72***	.49***
2. 食物栄養		-.37*	.11	-.84***	.50***
3. 幼児教育			.51***	.34*	-.14
4. 看護				-.12	.23
5. 音楽					-.40*
6. 文学					

\*, \*\*, \*\*\*は相関係数の有意性を示す

被服と食物栄養 > 被服と文学 > 被服と看護 > 被服と幼児教育 > 被服と音楽  
 .79 > .49\*\* > .12\*\* > -.36\*\* > -.72\*

(\*, \*\*はそれぞれ左隣りの相関係数との差について示す。)

図6 被服科尺度得点と他の尺度得点間の相関係数の大きさの比較

さて最後に、大学への希望進路別集団と高2の代表見本とを、6つの短大専門学科基準尺度で次ぎ次ぎに測定した結果を表8と図7 a, b, c で示した。表8の一番上の列の被服科への進学希望者は26名で被服科の尺度得点平均は55で一番高く、高2の代表見本平均より11点高い。次に高いのは食物栄養科の尺度得点平均の50で高2より7点高い。音楽科の尺度得点が一番低く20点で高2の29点より9点低い。高2の平均より一番高い被服の尺度得点は+11とアンダーラインで示される。

他の専門学科への進学希望者についても、高2の代表見本に比べてそれぞれの希望先の専門学科尺度得点が他の尺度得点より一番高いことを知る。図7 a, b, c で、専門学科希望者を下部集団毎にプロフィールで示すと、それぞれの希望先の専門学科尺度得点が□で印され、プロフィール中で高2の得点に比べ一番高いことが示されている。

さて、表8ではそれぞれの専門学科希望者が複数であるが、高校生のうちある学科への進学希望者を1名ずつ6つの尺度得点で同様の興味プロフィールを描けば、その学科希望者として妥当な興味パターンを持っているか否かを客観的に示し得るであろう。

表8 6つの短大基準興味尺度得点における大学進学希望の専門学科別集団と代表見本との比較

進学希望の専門学科	人員	尺度得点平均と高2代表見本の平均との差											
		被服		食物栄養		幼児教育		看護		音楽		文学	
		平均	差	平均	差	平均	差	平均	差	平均	差	平均	差
被服	26	55	<u>+11</u>	50	+7	29	-3	31	0	20	-9	37	+1
食物栄養	27	45	+1	48	<u>+5</u>	32	0	32	+1	26	-3	37	+1
幼児教育	75	41	-3	38	-5	42	<u>+10</u>	30	-1	30	+1	31	-5
看護	3	52	+8	46	+3	49	+17	49	<u>+18</u>	20	-9	30	-6
音楽	40	30	-14	29	-14	32	0	26	-5	46	<u>+17</u>	26	-10
文学	67	46	+2	44	+1	30	-2	30	-1	26	-3	43	<u>+7</u>
高2	60	44		43		32		31		29		36	

アンダーラインは横の各欄で差のもっとも高いもの。一番下の欄は高2の代表見本の平均得点。

図7a 専門学科への進路希望者のプロフィール (被服, 食物栄養)

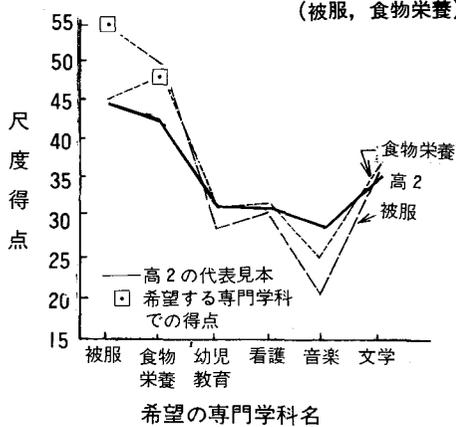


図7c 専門学科への進路希望者のプロフィール (音楽, 文学)

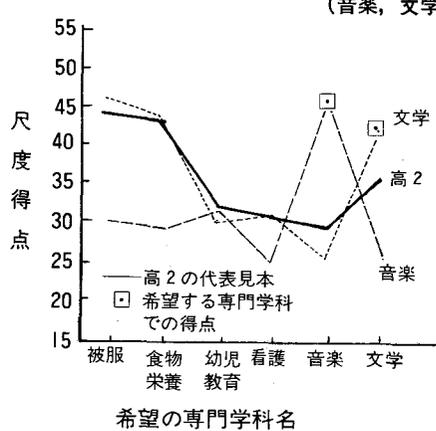
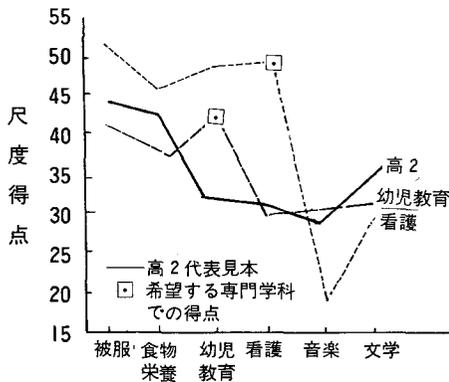


図7b 専門学科への進路希望者のプロフィール (幼児教育, 看護)



## 4. 考 察

### 1. 下部集団間の興味の差

この研究の第1仮説は、女子高校2年生の場合、4つの方面のそれぞれにおける下部集団間に興味の差があるということであった。D. Campbell<sup>(18)</sup> (1971) のSVIB方式で作られた興味目録検査を用いて、これら4つの方面(希望進路, 希望職業, 特技・趣味, 好きな学科)のそれぞれの下部集団間に興味の差違をみた。したがって第1仮説は正しいことが検証された。そしてこの仮説の検証過程において2つの事が発見された。1つは、短大被服科尺度で測定すると、①被服科希望者対音楽科希望者、②職業方面で美容関係, 家政, 商業, 服・装飾に対する音楽教師など、③手芸の特技・趣味対器楽の特技・趣味、④好きな学科で家庭対音楽、がそれぞれ尺度得点において最高と最低で対立していることである。このうち、②における美容関係, 家政(和洋裁), 服・装飾, 商業(化粧品店, 時計宝石店など)は被服科専門学生の好きな職業であり、③の手芸が好きなのもその特徴である<sup>(19)</sup> これらは被服科学生の特徴でありその尺度での得点がいずれも高い方の極をなし、これに対しそれと対極をなし低い得点の極がいずれも音楽に関するものであるといえよう。すなわち、被服科尺度で測定すると、被服科専門学生の興味と音楽的興味とが一直線上における両極をなすといえよう。

その2は、同じ音楽方面の特技・趣味でも器楽の好きな集団と音楽鑑賞の好きな集団では興

味得点で有意の差を示すことである。楽器へ活動的積極的に取り組む場合と、静的受動的に音楽を楽しむ場合とでは興味の異なる性質を示すという推測が成り立つようである。

## 2. 女子高校2年生の興味の発達

第2仮説は、女子高校2年生の興味は短大生の興味に比べ未発達であるということであった。いくつかの点で考察しよう。

- (i) 短大被服科尺度で特技・趣味別集団の興味得点平均を比較すると、高2は短大被服科専門学生より低いが、短大1年の一般集団より高いことは高2の興味発達に問題を提議する。

表9 3つの短大専門基準尺度で測定した短大1年一般集団と高2の得点の比較

項目	被服科		看護科		文学科	
	短大1	高校2	短大1	高校2	短大1	高校2
人員	479	60	479	60	479	60
平均	36.2	44.15	36.1	31.17	34.6	36.32
標準偏差	12.45	13.42	11.33	8.57	12.35	10.44
t検定	4.601***		3.2458**		1.0306 <sup>ns</sup>	

(高2は453名からの代表見本)

表9は短大1年一般集団と高2代表見本とを短大の被服科、看護科、文学科尺度で測定したときの興味得点(標準点)平均の比較である。被服科尺度では高2の方が高いが、看護科尺度では短大1年の方が高く、文学科尺度では両者に有意差がみられない。先に結果第2の(I)で述べた、高2の方が短大1年より特技・趣味別集団における得点が高いことは、被服科尺度で測定したからであろう。表9のように、尺度の種類によって短大1年と高2の得点差が違うのであれば、高2が興味発達上未熟か否かは決められない。発達を縦断的にアプローチしないで横断的にアプローチした本研究の場合、学年差が現われても発達の差違というより両集団の質の差によることがありうる。

- (ii) 短大専門学科2年に比較すれば、高2は興味が未発達であろう。結果の第2(III)にあるように、短大の6つの専門学科2年と高2代表見本を6つの尺度で比較すると、どの場合もすべて高2の興味得点が低い。この事は高2の興味は短大2年に比べると確かに未発達であることになる。

この場合、結果第2の(II)において、高2の被服科希望集団が短大の被服科2年の興味得点より高いのは何故かという疑問がおこりうるであろう。しかし、短大被服科2年がその基準尺度で平均得点50であっても、その下部集団のある者は平均以上であったり以下でありうる。同様に、高2の代表見本の平均得点が45であっても、ある特殊な下部集団は平均以上であることも平均以下であることもありうるわけである。ある下部集団が特に高点であっても、高2の興味得点はその全体の平均からすれば、確かに短大専門の2学年より低いから、短大専門の2学年に比べれば未成熟といえよう。ただ、高2の興味得点は短大1年の一般集団より全体として低いとはいえない。

そこで、本研究の第2仮説は一部分は肯定されるが、一部分は肯定できないといえよう。

## 3. 女子高校2年生の興味パターンの特徴

結果第2の(III)で述べたように、高2の代表見本を短大の6つの専門学科基準尺度でつぎつぎに測定すると、被服科尺度での得点が最高で、つぎは食物栄養科、そして最低は音楽科尺度での得点であった。また、この6つの尺度で測定した得点間の相関係数を算出すると、被服科と食物栄養科の間の相関係数が最も大であり、被服科と文学科の間のそれがその次で、被服科と音楽科の間が最小であった。

そこで、高2の代表見本の示す興味パターンは被服科2年生の興味にもっとも似ており、次

は食物栄養科2年生の興味に、第3は文学科2年生の興味に、そして最後には音楽科2年生の興味に似た関係をもつような興味パターンであるといえよう。

しかし、高2の興味パターンはなぜ被服科と食物栄養科専門2年生の興味に似ているのであろうか。

L. Harmon<sup>21)</sup> (1967) は、婦人の生活では彼女等の職業興味のみを基礎に選ぶなら就かなかったであろう職業に、強いて就かすような環境があることを指適している。また、M. Horner<sup>22)</sup> (1978) は、女子の職業的、教育的達成要求 (n achievement) では、男子より成功を回避する動機 Mas (motive to avoid success) が強いことを主張している。激しい知能的努力は、1人が勝てば他人が負ける競争的侵攻的行動である。このような競争と成功との強調は男性的特徴であり、異常に成功することは男性的特徴であって女性性の喪失として女子においては社会から拒否される。そこで、女子は成功を恐怖し、回避する動機を持つ。他方、失敗回避の動機もある訳だから、女子は職業と学問的努力において葛藤を持つ。この葛藤からの防衛のため、女子は家庭作り (homemaking) の如き葛藤の少ない方面に達成動機を投写するという。もしこの理論が正しいとすれば、男子は競争的知能的職業へ志向するし、女子は伝統的紋切型の職業 (主婦、教師、看護婦、図書館員など) を志向する傾向になるであろう。

本研究での女子では、コンピューター技師、獣医、臨床検査技師など競争的知能的職業希望者は45名 (約10%) しかない。医者、法律家、工業技師など全然みられない。女子の伝統的な職業の特徴を煮つめれば「家庭作り」になり、いわゆる主婦業となるであろう。そのようなことが、短大の家政 (被服、食物栄養) 科専門の学生の興味パターンにもっとも近い特徴として表われていると解釈するならば、かなり説得力のあるものとなるであろう。しかし、Hornerの Mas または fear of success 理論に対するいろいろな反証も挙げられている<sup>23)</sup> ことであるし、Horner 自身も Mas は集団によりまた個人により違った結果がありうることを述べている。<sup>24)</sup>

高2女子が被服科学生の興味を著しく示すという興味パターンは、男子のような職業志向というより、主婦志向に将来の進路の方向づけをしていることはほぼ確実のように思う。しかし、それが女子によく見られるという Mas によるのか、女子高校生の一般的傾向なのか、所属の学校の伝統的な精神的風土によるのか、教育の結果なのかなど、原因の究明は今後の研究に待つほかあるまい。

<付記> 本研究は「保育者に関する研究」として、中国短期大学研究費助成を受けたものの一部でもある。また概要は昭和53年12月開催の岡山心理学会第26回大会において口頭発表した。

資料の収集にあたって惜しみない協力を頂きました山陽女子高等学校の諸先生方ならびに生徒の皆さんに深く感謝申し上げます。

## 文 献

- (1) K. Evans, Attitudes and Interests in Education, 1965, p. 120~122.
- (2) D. Super & J. Crites, Appraising Vocational Fitness, 1962, p. 454.
- (3) D. Campbell, Handbook for the Strong Vocational Interest Blank, 1971, p. 1.
- (4) W. Dipboye & W. Anderson, The Ordering of Occupational Values by High School Freshmen & Seniors, Pers. & Guid. J., Oct. 1959, p. 121~124.
- (5) W. Gribbons & P. Lohnes, Shifts in Adolescents' Vocational Values, Pers. & Guid. J., Nov., 1965, p. 248~252.
- (6) H. Carter & E. Strong, Sex Difference in Occupational Interests of High School Students, Pers. Jour., XIII, 1933, p. 166~175.
- (7) G. Madaus & R. O'Hara, Vocational Interest Patterns of High School Boys: A Multivariate Approach, J. Counsel. Psych., 14, 1967, p. 106~112.

- (8) 棕野要, 柳井晴夫, 青年期における興味発達の縦断的研究, 教心研, 25, 3, 1977, p. 145~156.
- (9) A. Rezler, Characteristics of High School Girls Choosing Traditional or Pioneer Vocations, Pers. & Guid. J., Mar., 1967, p. 659~665.
- (10) 本明寛, 浅井邦二, 織田正美, 女子短大生の適職判定のためのテストバッテリー作成の試み II 女子の職業興味調査, 日心第33回大会発表論文集, 1969, p. 469.
- (11) 棕野要, 笹野完二, 松田淳之助, 平松芳樹, 女子短期大学生の興味測定尺度構成, 今治明德短期大学研究紀要, 9, 1976, p. 15~42.
- (12) 同上 p. 31.
- (13) J. Darley & J. Hagenah, Vocational Interest Measurement, 1955, p. 11.
- (14) 棕野要ら, 前掲1976, p. 33~39.
- (15) 棕野要, SVIB作成方式により作られた検査を用いての青年期興味発達の研究, 岡山大学教育学部研究集録34号, 1972, p. 41~62.
- (16) 棕野要, 青年期の興味発達の縦断的研究, 日教心第10回大会論文集, 1968, p. 38~39.  
井上健治, 柏木恵子, 古沢頼雄編, 青年心理学, 昭50, p. 298.
- (17) 棕野要ら, 前掲1976の研究資料 (未発表)
- (18) D. Campbell, opt. cited, 1971.
- (19) 棕野要ら, 前掲1976, p. 19. 棕野要ら, 前掲1975, p. 513.
- (20) 棕野要ら, 前掲1976, p. 29.
- (21) L. Harmon, Women's Working Patterns Related to Their SVIB Housewife and "Own" Occupational Scores, J. Counsel. Psych., 14, 1967, p. 229~301.
- (22) M. Horner, The Measurement and Behavior Implications of Fear of Success in Women, in J. Atkinson & J. Raynor (edit.) Personality, Motivation and Achievement, 1978, p. 47.
- (23) M. Zuckerman & L. Wheeler, To Dispel Fantasies About Fantasy-Based measure of Fear of Success, Psych. Bull., 82, 1975, p. 932~946.
- (24) M. Horner, opt. cited, 1978, p. 68.

## Abstract

Six interest test scales for six special courses of girls' junior college students, constructed after the Campbell's SVIB<sup>(1)</sup> (1971) were administered to 453 eleventh grade girls of one senior high school for the purpose of investigating the differentiation, development, and pattern of interests of senior high school girls.

Mean interest scores were proved to be different among several subgroups of those girls in each of four aspects: college courses, vocational desire, like-dislike of school subjects, and hobby. The different features of two interest patterns, indicated by students of the college course of clothing and by those of the college music course, were presumed to be bipolar in each of four aspects. Every mean interest score of the 11th grade girls, measured by each of the above-mentioned six scales, was lower than every mean interest score of the 2nd grade students of each of the six junior college each course. But some of mean interest scale scores of the 11th graders were higher and the others were lower than those of the 1st grade students. Therefore, from the viewpoint of development the interest pattern of the 11th graders in general was not totally immature compared with that of the 1st grade students.

The highest interest score of the 11th grade girls was measured by the scale of girls' junior college course of clothing, the second highest by the food and nutrition course scale, the third by the literature, the fourth by the infancy education, the fifth by the nursing and the lowest by the music course scale.

Whether is such interest structure of the 11th grade girls common in other senior high

school girls or not ? Whether is this the cumulative effect of the traditional trainings of one school ? Whether does this support the “motive to avoid success” theory of M. Horner<sup>(2)</sup> (1978) ? They remain to be answered in the future research.

### References

- (1) D. Campbell, Handbook for the Strong Vocational Interest Blank, 1971.
- (2) M. Horner, The Measurement and Behavioral Implications of Fear of Success in Women. In J. Atkinson and J. Raynor (Eds.) Personality, motivation, and Achievement, 1978.